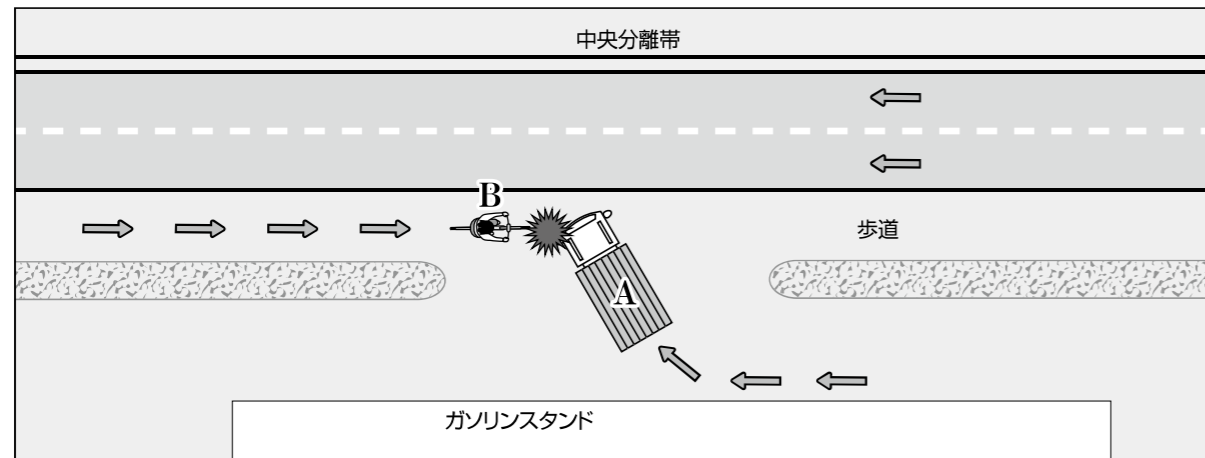


職場における交通安全指導

Part 123

道路外施設から左折時、自転車と衝突



■事故の概要

- 事故の当事者
当事者A：運転者（普通貨物車）、30歳代、男性
当事者B：自転車、20歳代、女性
- 被害状況
A：車両左前部凹損
B：重傷（頭部挫傷、全身打撲）
- 道路状況
片側二車線の国道

事故状況

運送会社に勤務して10年目のAは、普通貨物車に乗務し日用雑貨品等の配送を行っていた。事故当日は、道路の渋滞箇所が多く、次の配送先への到着時間が迫っていた。Aはガソリンスタンドで給油を終え、配送先に向かうため、国道を左折する前に歩道の手前で左右の安全確認を行った。右方向から来る車両が途切れたので左折を開始したところ、歩道の左方向から直進してきた買い物帰りの自転車に乗った女性と衝突した。

事故の原因

Aはガソリンスタンドを出て左折をする際、車両がなかなか途切れず、右方向から走行してくる車両を気にしていました。信号が変わるまで待たないと左折できないと思ったところにタイミング良く車両が途切れたので、つい急いで左折を開始してしまいました。左方（歩道上）の安全確認不足と、早く左折をしてしまおうとする「急ぎの心理」がこの事故の原因です。

安全指導

今回の事故のように歩行者や自転車との事故は、接触しただけでも重大事故につながる可能性が高く、運転中は歩行者や自転車に対する特段の注意が必要です。特に道路外施設から出るときは、車道の状況だけに注意を奪われて、歩道の状況には目が向きにくく、歩行者や自転車を見落としてしまいます。「急ぎの心理」が原因の事故は、例えば「車間距離が詰まってしまい追突してしまった。」「つ

い一時停止を怠って交差点に進入し、出会い頭に衝突してしまった。」など、誰でも潜在的に持っているものです。急いでいる時ほど慎重な運転を心掛けましょう。

また、「急ぎの心理」には以下のケースがあげられます。

1. 最初から急ぐケース
2. 予定が狂って途中から急ぐケース
3. 運転中に発生する事象によって急ぐケース

一般的には、「信号無視」、「一時停止無視」、「安全不確認」等の交通ルールを無視しての運転をしがちになる他、「車間距離を詰めて走る」、「無理な追い越し」、「車線を頻繁に変更する」、「すぐにクラクションを鳴らす」など普段よりも荒っぽい運転操作が危険な行動につながり、昨年6月30日に厳罰化された「あおり運転」に結びついてしまいます。

また、自転車利用者の多くは歩行者感覚で危険な行動をしがちです。「急ぎの心理」が働くと見落とす確率が高くなることから、自転車の行動特性をよく理解しておきましょう。

自転車の行動特性

- ・バランスを崩しやすい。
- ・後方の安全確認を怠り、いきなり進路変更をする。
- ・歩道から突然飛び出してくる。
- ・一方通行を逆走する。
- ・一時停止の標識や赤信号を無視する。
- ・夜間、無灯火で走ることが多い。

【「急ぎの心理」に対処するには】

①急ぎの要因を作らない

仕事の段取りをしっかりと行い、余裕のあるスケジュールを組む。

途中遅くなりそうな時は会社を通じ取引先に連絡してもらい、精神的負担を軽くし、急ぎの運転で遅れを取り戻そうとしない。

②急いでも得にはならないと認識する

道路を走行する以上、信号機、交通標識等があり、自分の思い通りに進行できるものではなく、急いでもわずかな時間しか短縮できない上に交通事故発生の可能性が高まるなど、決して得にはならないということをしっかりと認識する。

③急ぎの気持ちをコントロールする

「今、自分は焦っているな。」と自分を冷静に客観的に見つめることができるよう習慣づける。

④自分の運転性格を見直す

「急ぎの心理」にならないようにするには、まず、自分の運転性格を知ることが大切です。

運転には、ドライバーの性格が如実に表れます。「急ぎの心理」は、「焦り」や「苛立ち」の気持ちから起きやすいので、せっかちな人やイライラしやすい人は特に注意が必要です。

性格は、簡単に変えることはできませんが、運転中は平常心を保ち、交通ルールを守ることが大切です。

⑤コメンタリー運転を実践する

急いでいる時こそ、安全確認は欠かせません。「右よし」「左よし」「前方よし」と声に出してコメンタリー運転を実践しましょう。

今回は、「急ぎの心理」が惹き起こした事故でしたが、慌てず信号が変わるまで待つことで余裕を持って左右確認ができていれば、防ぐことができた事故です。

歩道上には、歩行者、自転車がいるかもしれないという「かもしれない運転」と「コメンタリー運転」を実践し、交通事故の根絶に努めましょう。